

*大河内泰樹先生の自己紹介

一哲学会の皆様、今年の4月1日に社会学研究科准教授に着任いたしました、大河内泰樹（おおこうち・たいじゅ）です。どうぞよろしくお願いいたします。

こちらの大学院を修了しておりますので、以前から会員ではありますが、この二年間は京都におりました関係で、なかなか出席できず失礼いたしました。

専攻は哲学でドイツの近現代哲学を中心に研究しています。大学院では島崎先生のもとで学び、主にヘーゲルの論理学に取り組んできました。在学中、博士課程二年目でドイツに留学し、一橋はその後単位互換で、単位取得退学したのですが、ようやく2007年にボーフム大学で博士号を取得しました。テーマは、ヘーゲル論理学の「本質論」をカントのライプニッツ／ヴォルフ形而上学批判を参照しながら、実体形而上学批判として解釈するというもので、2008年に Taiju Okochi, *Ontologie und Reflexionsbestimmungen. Zur Genealogie der Wesenslogik Hegels*, Würzburg: Königshausen und Neumann, 2008) (『存在論と反省規定 ヘーゲル論理学本質論の系譜学のために』)として出版しています。(日本語にしたいと思っっているのですが、なかなか進みません)

最近では、ハーバーマス、ホネットや、R・ブランダムに関心を持って取り組んでいます。フランクフルト学派の前二者に比べて、ブランダムはあまり知られていないかもしれませんが、アメリカ分析哲学系で、ヘーゲルを積極的に受容しながら、独自の哲学を展開している珍しい哲学者です。分析哲学の訓練を受けていないので、私にとっては少し冒険なのですが、逆に分析哲学の研究者はヘーゲルが分からないでしょうから、私に取り組む意味もあるだろうと思っています。今後数年はブランダムに取り組む予定で、これを通じてドイツ観念論、言語哲学、プラグマティズムを媒介したいと思っています。

今、ゼミではヘーゲル『大論理学』の「概念論」を読んでいます。やはり、古典的なテキストに徹底的につきあってみることが、哲学のような学問には必要だというのが、私自身一橋で学んだことです。この伝統は必ず守っていきたいと思っています。他方で、現代的なテーマについても適宜取り上げるつもりです。古典とアクチュアリティのバランスを私自身模索しながら、院生の皆さんと考えていきたいとおもっています。

すでに、この夏学期の間、講義やゼミを行ってきましたが、ゼミ生が相互に批判を戦わせながら、活発に議論する雰囲気は健在で、自分のルーツに帰ってきたように感じました。是非こういう雰囲気はずっと残していかなければならないし、それがなければ学問の発展もないでしょう。

思想哲学系の学問が軽んじられている時代の中で、このようなポジションに着かせていただいた社会的責任は大変重いと感じています。みなさまのご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願いいたします。